

『吾妻鏡補』にみるハ行子音について—曉母合口字に注目して—

王 竣 磊 (上海外国語大学学生*)

1. はじめに

『吾妻鏡補』（1814 自序）は清の儒者翁広平が編纂した日本研究の名著である。同書には「国語解」と称される巻があり、それは類書のような意義分類体を形にとった、漢字で日本語を音写した部分である。しかし、それは翁が自ら施したわけではなく、「天文時令類」から「通用類」までは『海外奇談』から、「州名島名類」は『日本図纂』から、「長崎町名」は『東洋遊客略』から、それぞれ引用したものである。延べ 1223 項目を収録しているが、『海外奇談』からの引用部分が 1058 項目に上り、「国語解」の中心をなしている。典拠となる『海外奇談』はすでに散佚してしまった可能性が高く、直接に確認できないが、収録された語彙からみれば、18 世紀初期から 19 世紀初期までの成立で長崎あたりの方言を音写していることがわかり、18 世紀の長崎あたりの方言を反映した言語資料として利用できる（渡辺 1963、高山 1989）。一方、同資料の基礎音系¹は中国の呉方言であることも判明できる²。本稿はこの『海外奇談』からの引用部分（以下、『吾妻鏡補』と呼ぶ）を対象に、音訳漢字にみる日本語のハ行子音について考察を試みる。

2. ハ行音にあたる音訳漢字

2.1 資料調査

『吾妻鏡補』は渡辺（1962）、大友・木村（1972）と高山（1998、1999、2000、2001）によって解説されているが、その解説方法は一致していない。本稿は、見出しから語を引き当てる作業に重点を置いた高山（1989）の解説方法を採用し、氏が解説した 422 語と、筆者が解説を試みた 636 語とを合わせて用いる。その中から、ハ行音に関わるもの、しかも解説として確かなもの³を抽出すると、計 113 項目に上る。仮名別に音訳漢字を整理すると、以下の表 1 のとおりである。丸括弧内の数字は当該漢字の使用回数である。

仮名	音訳漢字とその使用回数
ハ	花(13) 豁(9) 法(8) 哈(3) 化(2) 蟹(1) 画(1)
ヒ	非(26) 希(4) 吁(2) 勛(1) 虚(1)
ヒヤ	譴(3)
ヒョ	漂(1) 孝(1)
フ	勿(7) 夫(6) 福(6) 付(3) 敷(3) 副(1) 幅(1) 仏(1)
ヘ	非(2) 希(2) 吸(1)
ホ	火(3) 忽(2) 福(1) 烘(1) 何(1) 胡(1) 呼(1)

表 1 仮名別の音訳漢字とその使用回数

2.2 音訳漢字の整理

ハ行子音を考察するためには、音訳漢字を仮名別に分類するほか、その声母に主眼を置いて整理する必要もあると考えられる。『吾妻鏡補』の基礎音系は 18 世紀の呉方言なので、通時の変化はまず無視できない。また、呉方言といっても、具体的にどこの方言かははっきりとわからないので、ある特定の地域でしか成り立たない結果は避けたほうがよからう。すなわち、現代のある特定の地域の音価を基準として整理するのではなく、できるだけ呉方言全体に通用できる、しかも中古音から現代呉方言までの通時的变化に耐えうる整理の仕組みが望まれる。

上述の旨にしたがい、本稿は上述の音訳漢字を 3 つのグループに分類した。分類の結果と、グループ別・仮名別の音訳漢字の使用回数は以下の表 2 と表 3 で提示する。また、本稿における中古音の音韻体系はカールグレン（1940）による。現代呉方言の状況は趙（1928）による。

グループ	略称	音訳漢字
軽唇音（非母、敷母、奉母）・重唇音（滂母）	F 型字	法 非 勿 夫 福 付 敷 副 幅 仏・漂

* wjlbp2009@gmail.com

¹ 基礎音系とは音写に使った中国語の音韻体系のことを指す。² 丁鋒（2008）『日漢琉漢対音与明清官話音研究』中華書局の p11-12 を参照。また、筆者も同資料における中古音の全濁字と日本語の濁音との対応関係を検証した。結果として、対応関係があることがわかり、やはり基礎音系が呉方言であると認められる。ほかにも音韻・語彙の証拠がある。³ 解説できない項目、推測であって解説者も確信を持たない項目、ハ行音にあたる音訳漢字が解説者に改定されてからやっと解説できた項目などは不確かなものとして除外する。

喉音（曉母、匣母）	開口	H 型字	哈 蟹 希 謔 孝 吸
	合口	HU 型字	花 ⁴ 豁 化 画 吁 勛 虛 火 忽 烘 何 胡 呼

表 2 音訳漢字の分類

仮名	音訳漢字		
	F 型字	HU 型字	H 型字
ハ	(8)	(25)	(4)
ヒ・ヒヤ・ヒョ	(27)	(4)	(8)
フ	(28)	(0)	—
ヘ	(2)	(0)	(3)
ホ	(1)	(9)	—

表 3 グループ別・仮名別の音訳漢字の使用回数

分類の基準としては以下の 3 点が挙げられる。

(1) 軽唇音・重唇音と喉音

軽唇音・重唇音は中古音においても現代呉方言のいずれの地域においても唇が調音に関与している。それに対し、喉音は軟口蓋か声門かのあたり、あるいは口蓋化を起こして硬口蓋のあたり、とにかく口腔の後部で調音されており、唇が調音に関与していない。よって、上述の音訳漢字は大別して軽唇音・重唇音と喉音といった 2 種類に分けられ、「声母が唇音であるかどうか」という要素が弁別的である。

(2) 喉音における開口と合口

開口と合口との区別は中古音において円唇性のある介音を持つかどうかによるが、介音はよく主母音の通時的変化と絡んでおり、呉方言では必ずしも介音の位置に円唇性を持つ母音・半母音が来るとは限らない。また、中古音自体において「吁」「勛」「虚」「胡」「呼」といった虞韻、文韻、模韻の字は開口と合口の両方にも属している。そこで、「介音」という、音節構造を表す見方ではなく、単に「声母のすぐ後ろに円唇性を持つ要素が来るかどうか」という基準なら、現代呉方言に通用できてしかも通時的変化に耐えうる見方となる。すなわち声母のすぐ後ろに円唇性を持つ要素が来ないのは開口であり、逆になると合口となる。そうすると、「吁」「勛」「虚」「胡」「呼」も開口とならず、合口にしか属していない。

(3) フ・ホにあたる音訳漢字の特殊性

上述した開口と合口の枠組みはフ・ホにあたる場合、問題が生じる。フ・ホを音写すること自体は音訳漢字の選択に制限をかけ、声母のすぐ後ろに円唇性を持つ要素が来ないと音写として逆に不自然となってしまう。フにあたっては軽唇音字しか用いられていないので特に問題がない。ホにあたる音訳漢字のうち、中古音で開口とされた「烘」「何」について考察してみる。中古音の推定音価はそれぞれ[xuŋ][ɣa]となり、現代呉方言においては[hon][ɦio~ɦiu]が主流となる。「何」は果摂歌韻字で、歌韻の母音は呉方言においてa>ɔ>o(>u>Λu)といった通時的変化をたどっていたことから、ある中間段階でホにあてられたであろう。中古音の規定と一致しないのは望ましくないが、便宜を図って本稿は「烘」「何」を合口に入れ、フ・ホにあたる音訳漢字に喉音開口のグループを立てないことにした。

2.3 音訳漢字が反映したハ行子音と問題提起

日本語のハ行子音の変遷はその一般的な過程が p>ɸ>h と説かれており、特にɸ>h という変化が「脱唇音化」とされ、音韻史上重要視されている（高山 2016）。『吾妻鏡補』が対応したのはまさにɸ>h という過程である。

2.2 の整理からわかるように、F 型字は声母が唇音なので、ハ行子音が両唇摩擦音[ɸ]であったことを反映しているのであろう。フにあたる音訳漢字がすべて F 型字であることもその対応関係を物語っている。H 型字は発音全体に唇が関与していないので、対応したハ行子音が唇音でなかったこと、すなわち声門摩擦音[h]（硬口蓋摩擦音[c]）の類を反映しているのであろう。

しかし、HU 型字については二通りの考え方がある。一方、声母に着目すると、唇音でないで、やはり H 型字と同様に、ハ行子音が[ɸ]でなく、[h][c]であったことを反映していると考えられる。もう一方、声母のすぐ後ろに円唇性を持つ要素が来るので、声母と円唇性要素とを組み合わせると、F 型字のようにハ行子

⁴ 「花」「化」「画」は仮撰麻韻二等字で、その韻母は現代呉方言で一般的に[o]である。ただし、杭州では[ua]である。3.2 で取り扱った 16 世紀の資料でも「花」がハにあてられている。19 世紀末期の『東語簡要』でも麻韻合口字がワにあてられた例が見られる。馬（2014）は文読[ua]:白読[o]の関係を想定したが、的中であろう。もし杭州音で音写すれば、そもそも問題がない。

音[ɸ]を反映しているのではないか、という考え方もありうる。

さらに、表3で示した、フ以外の音訳漢字の使用回数からみれば、ハ・ホにあたってはHU型字が中心を占め、F型字がそれに次ぎ、H型字が最も少ない。ヒにあたっては逆にF型字が中心となり、H型字がそれに次ぎ、HU型字が最も少ない。ヘにあたってはF型字とH型字が同じ頻度で使われているが、HU型字が使われていない。F型字とH型字が併用されていることについても解釈が求められるが、やはりかなりの頻度で使われたHU型字の位置づけが問題となる。

3. HU型字の位置づけをめぐる検討

3.1 先行研究とその問題点

このHU型字の問題を扱った先行研究として濱田（1952）、大友（1963）と馬（2014）が挙げられる。

濱田（1952）は「従来も、シナ人の手に成った資料で、日本語のハ行音を曉母の文字で写していることなどから、既に中世末期頃にはその両唇の摩擦は相当弱まり、時に殆んど[h]の形で実現されることがあったのではないかと考えられていたのである」と曉母字全体に対して考えを述べたが、具体的にどの資料を指して言ったのかわからない。また、同じ段落の注には「同じく[h]系統の文字をあてていても…（中略）…それが合口の介音を含むものであることから、むしろやはり国語の両唇摩擦音を表わしたのと考えられるべきであろう」という補足も見られ、本文中の考え方とずれが生じる。おそらく、本文はH型字の位置づけについての見解で、注はHU型字についての判断であろう。そうすると、HU型字はF型字と同定されたことになる。

大友（1963）は『日本国考略』（1523年刊行）という資料を考察し、曉母合口字（HU型字）について「両唇音の[ɸ]に近いものである事は明瞭である」と一旦判断したあと、曉母開口字（H型字）の存在や溪母字の応用などから、「[ɸ]から[h]への過渡期の音を示すもの」と判断を改め、結果的に曉母合口字を[h]への移行の証拠として認めた。『日本図纂』と『日本風土記』についての考察にもこの考え方を適用し、[h]への移行としたが、例えば『日本風土記』に対する考察でHU型字が多用された事実から直ちに当該音節の子音を[h]と推定したことにはやや問題がある。

同じく『日本国考略』を扱った馬（2014）は使われた曉母字を個々検討し、それらの用例は誤刻、解説に問題がある項目、オ段開音を配慮した項目、後接の濁音を配慮した項目ばかりなので、音写の際にはHU型字が独立した選択肢ではなく、中国語側の制限によってやむをえず選ばれたと論じ、ハ行子音[ɸ]を示した音訳漢字とした。しかし、上述の事情のない唯一の例「2 日 虚路 ヒル」が残っている。氏はそれについて、円唇性介音を持つので[ɸ]を表していると片づけ、さらに同結論を16世紀の中国資料全体に適用した。

以上、3氏それぞれの考えをまとめたが、HU型字に対し、意見がわかれたことがわかる。2.3でも述べたように、濱田（1952）と大友（1963）の結論はあくまでも1つの可能性に過ぎず、しかもそれが研究者の主観的判断による結果と言わざるをえない。馬（2014）は中国語側の制限という視点を提起し、問題の解決に有効である。しかし、「虚」の1例と16世紀の中国資料全体に対し、円唇性介音で片づけたことに問題があり、結局研究者の主観的な「二者択一」になってしまった。なお、3氏とも16世紀の中国資料しか扱っていなかった、という点も指摘しておきたい。

馬（2014）が提示した「制限」の視点から『吾妻鏡補』を検討した結果、疑わしい例は「0134 鬚 助其 ヒゲ」しかおらず、「助」が濁音の前にある入り渡りの鼻音を配慮した音訳漢字と想定できる。しかし、もともと同資料では「0118 癪痢頭 蟹其 ハゲ」「0124 眉毛 梅其 メエゲ」のように、ゲの前に入り渡りの鼻音が認められない。「制限」の角度からでも、『吾妻鏡補』で多数使われたHU型字の位置づけは判明できない。

以上のことを踏まえて、HU型字の位置づけを明らかにするためには、『吾妻鏡補』のみで「二者択一」をするのではなく、むしろ呉方言系中国資料全体において検討したほうが有効であろう。

3.2 呉方言系中国資料における各型字の使用

本稿は以下の6つの呉方言系中国資料（『吾妻鏡補』を含む）において、ハ行音にあたる音訳漢字を調査した。成立の早い順に（A）～（F）の番号をつけた。

- （A）『日本国考略』（1523年刊行）「寄語略」 テキスト：京大（1965） 解説：同テキスト、馬（2014）
- （B）『日本図纂』（1561年刊行）「日本紀略」の地名と「寄語島名」 テキスト：同上 解説：同テキスト
- （C）『日本風土記』（1592年刊行）「寄語」の増補部分 テキスト：京大（1961） 解説：同テキスト、大友（1963）
- （D）『吾妻鏡補』
- （E）『東語簡要』（1884年刊行）の増補部分 テキスト：京大（1968） 解説：大友・木村（1972）
- （F）『東語入門』（1895年刊行）の「いろは歌」と「五十音図」 テキスト：同上 解説：必要なし

調査の結果は表 4 で示す。解説が不確かなものは取り入れないことにした。中国語側の制限によるやむをえない選択であろうと思しい漢字はその前に「*」をつけた。説明が必要な漢字は丸括弧に入れてその説明を表の下に加えた。さらに、1つの資料と1つのハ行音に対し、使用回数の多く、すなわち音写の中心と認められる音訳漢字の種類についてはその欄全体に灰色をかけた。

		(A)	(B)	(C)	(D)	(E)	(F)
ハ	F 型字	發法番	法番罷	發法番	法		
	HU 型字	(*花)	花 (*花)		花豁化画		
	H 型字				哈蟹	哈海黑夯瞎	哈
ヒ	F 型字	非別肥法 捱匪	非飄	非毘	非漂		
	HU 型字	虛*熏*薰*勳 (去)	*兄	虛許朽血*熏	吁勛		
	H 型字			(下鰓)	希 (鰓) 孝	希稀昔喜興嚇	希黑以
フ	F 型字	付浮伏福扶粉	福払	付浮伏福払勿風 弗幅復粉分布	勿夫福付敷副幅 仏	付勿夫	夫
	HU 型字						
ヘ	F 型字				非		
	HU 型字			*血*靴*梟			
	H 型字				希吸	海希	海
ホ	F 型字	付坡發		伏福勿封	福		
	HU 型字		昏	貨忽 (化火河)	火忽何烘胡呼	化霍花烘	化

表 4 吳方言系中国資料における各型字の使用

【説明】

1. (*花) と (化 火 河)

問題として取り上げた 4 文字は共にハウにあたり、そこでオ段長音開合の問題と絡んでいる。16 世紀の中国資料では二重母音アウが長音化し、合音と統合したと思しい例もあるが、やはり一般的に[au]と写され、合音と区別されている。しかし、ハ行音の場合、仮に[ɸau]でも吳方言は該当する漢字を持たないので写しにくい。そうすると、この 4 文字は二重母音アウを写そうとしてハにあたる音訳漢字とするべきのか、それともオ段長音を写そうとしてホにあたる音訳漢字とするべきのか、決めがたい。本稿は馬 (2014) と同じ、一応ハにあたるものとし、考察から除外するが、(C) の場合、「363 道士 法戸里 ハウリ」といった、ハウを 2 文字で音写した例が見られるので、「化」「火」「河」をオにあたるものとした。

2. (去) 「302 檜 去那鷄 ヒノキ」の 1 例

中古音では溪母魚韻字で、現代吳方言では声母が口蓋化を起し、[tɕʰi]のような形式が主流となる。通時的变化を視野に入れても、日本語のヒにあたる漢字としてやや不審である。ここでは一応中古音の状況に従い、声母が唇音でなく、しかも声母のすぐ後ろに円唇性を持つ要素が来るので、HU 型字に属させた。

3. (下 鰓) と (謔)

共にヒャに使われた。「353 百姓 下姑小 ヒャクシャウ」「679 百 鰓古 ヒャク」「0722 百 謔戈 ヒャク」。仮にヒャの子音を唇音としてもそれに対応する音節が吳方言に存在しえないのでこの 3 文字は考察から除外すべき例であるが、(C) に時間的に近い (A) では「55 百姓 別姑常 ヒャクシャウ」「334 百 法古 ヒャク」のように、ヒャに「法」「別」といった F 型字が使われ、母音よりも子音を重視する態度が窺える。(D) に時間的に近い (E) でも同じ現象が見られ、ヒャに「嚇」のような、韻母が日本語の拗音に一致していない H 型字が使われた。やはり母音よりも子音を重視する態度が窺える。よって、本稿は「下」「鰓」「謔」といった H 型字をハ行子音を反映しているものとし、「*」をつけないことにした。

3.3 考察と結論

表 4 の示したとおり、16 世紀初期から 19 世紀末期まで、すべての吳方言系中国資料ではフが F 型字で写されている。F 型字とハ行子音[ɸ]との対応関係が再確認できる。また、(F) 『東語入門』という資料は東京方言を写しているため、その音訳漢字と現代語の状況から、H 型字とハ行子音[h][ç]との対応関係が確認できる。

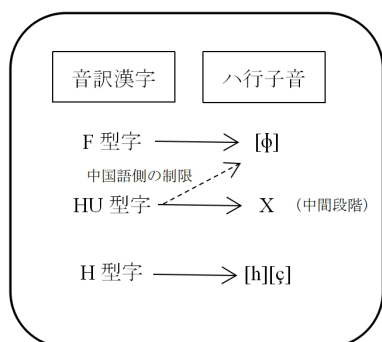
仮に HU 型字を F 型字と同定する。そうすると、両方は共にハ行子音[ɸ]を表していることになる。音写にあたっては両者の違いが一種の用字法のようなものになる。しかし、表 4 からわかるように、(A) 『日本国略』ではハに F 型字しか用いられず、(D) 『吾妻鏡補』では逆に HU 型字が中心的に使われている。

ホの場合、(A)『日本国考略』ではF型字しか使われず、(C)『日本風土記』ではF型字が中心となりつつもHU型字が用いられており、(D)『吾妻鏡補』になるとHU型字中心に転じている。F型字とフとの対応関係を背景に考えると、単に用字法ぐらいの違いなら上述の差異は解釈しにくい。

さらに考察すると、16世紀の資料ではヒを音写するために、初頃の(A)『日本国考略』ではHU型字が2例しかないが、後半期の(C)『日本風土記』になると、HU型字が逆に中心を占め、H型字まで出ている(しかも同じ項目でF型字からH型字に変わった例、【説明】3を参照)。それと呼応して、ホの音訳漢字は(A)『日本国考略』でF型字のみであるが、(C)『日本風土記』になるとHU型字が一部使われている。16世紀では、時代が下るにつれ、HU型字が次第に使われるようになった、という趨勢が看取られる。17世紀後半に京都語のハ行子音がすでに[h]へ移行している(有坂 1938)ということに合わせて考えると、16世紀の中国資料が提示したこの趨勢はやはりハ行子音の変化と関連しており、用字法レベルのことではない、ということが理解できるであろう。

音写する側にとって、HU型字は決してF型字の代用(あるいは逆)ではなく、F型字と同一視することのできない、独立した選択肢であろう。よって、HU型字はF型字のようにハ行子音[ɸ]を写すことにならず、F型字の示した音価と異なったものを反映していることがわかる。

上述の分析と全く同じ考え方で(D)『吾妻鏡補』(E)『東語簡要』(F)『東語入門』を合わせて考察すると、やはりHU型字はH型字のようにハ行子音[h][ç]を写すことにもならず、H型字の示した音価と異なったものを反映していると考えなければならない。



以上の分析から、HU型字は音写する際に与えられた1つの選択肢として、[ɸ]から[h][ç]への過渡期(中間段階)の音価を表していることになる。図式でその対応関係を示す。

(左) 図1 音訳漢字とハ行子音との対応関係

したがって、『吾妻鏡補』という資料は、18世紀の長崎あたりの方言で起こった、ハ行子音の声門摩擦音(硬口蓋摩擦音)への移行を反映していることになる。ハはさきに移行し、『吾妻鏡補』の段階がその変化の最中にある。ホも、その特殊性を鑑み、おそらく早く移行が始まり、『吾妻鏡補』の段階が完了に近い状態であろう。ヒは『吾妻鏡補』の段階で大体両唇摩擦音が維持されており、それよりも遅れて移行したのであろう。へについてはやや判断しがたい。

4. 音韻論的解釈

以上、音声学のレベルでHU型字の位置づけを検討した。その具体的な音価はさらに検討・推定する必要があるが、ここではひとまずその音韻論上の意味を考察していきたい。

4.1 「唇音」の射程

2.3でも述べたように、ハ行子音の変遷は一般的に $p > \phi > h$ と説かれている。 $p > \phi$ という「唇音」範囲内の変化と区別するために、 $\phi > h$ の過程はまず「脱唇音化」として捉えられる(高山 2016)。しかし、 $\phi > h$ の過程に即して考察すると、「唇音」という概念の射程が問題になってくる。3.3でHU型字の表した音価は[ɸ]から[h][ç]への中間的なものと論じたが、それは果たして「唇音」であったのか。仮にHU型字の表した音価がそのまま[hw]あるいは[hʷ]とすると、やはり唇の動きが完全に消えたわけではないので、「唇音」としても許容されるであろう。そうすると、HU型字の存在も結局「唇音」範囲内の変化の反映に過ぎず、「脱唇音化」の反映にはならない。

17世紀の黄檗唐音では中国語のfaにフワ・フハがあてられ、huaにハがあてられた。それに対し、有坂(1938)は「ハは既に完全なhaになつてゐたかも知れない。或は、仮にいくらか唇音性が残つてゐたとしても、唇の働きは、支那語のhuaの場合よりも更に軽微なものに過ぎなかつた」と論じた。huaは本稿の言うHU型字に相当するものなので、この場合のハは唇音性を帯びていても不思議ではない。ハの子音は唇音性を含んでいたにせよ、含んでいなかったにせよ、フのそれと異なるものとして話者が認識していた。この場合、フを「唇音」とすれば、ハの子音はすでに「非唇音」の範囲に入っているのではないのか。

すなわち、この $\phi > h$ の変化を考察するにあたって鍵を握ったのは、「唇音」という概念を音声学的にどう規定するかということではなく、話者にとってハ・ヒ・ヘ・ホの子音の音声の実現がフのそれと同一視できるかどうか、ということであろう。同一視できなくなれば、「非唇音」への移行の開始となり、「脱唇音化」となる。そう考えたほうが有効であろう。ゆえに、HU型字も話者の感覚に委ねてほかの音節と対照的に考察しなければならない。これは単に中国人の著した『吾妻鏡補』では判断できないことであろう。

4.2 唐話資料による検討

有坂（1938）によると、長崎あたりの方言を反映する唐話資料、例えば岡島冠山の『唐話纂要』（1718 刊行）などでは、中国語の **fa**、**hua** が共にハで写されている。ゆえに、有坂は「長崎あたりでは、ハの頭音は第十八世紀頃までも未だ唇音だった」と論じた。しかし、『唐話纂要』では「好」「海」などの H 型字にも「ハ〇ウ」「ハアイ」とハがあてられており、結局中国語の **fa**、**hua**、**ha**、いずれもハで写されていることになる。**fa** とハの対応関係がある以上、ハの子音に幾分の唇音性が認められるとしても、それが話者にとってフと区別できるかどうか、確認できない。ハは **ha** にも対応しているので、音声的にむしろ『吾妻鏡補』の HU 型字が示した、中間段階の音価に近いであろう。岡島冠山は唐音資料の編纂者と異なってフワのような表記の仕方を考案しておらず、ハの子音が **fa** にも **ha** にも通用できると考えていたであろうか。

ここで、焦点を集めたいのは新井白石が編纂した『東音譜』（1719 自序）である。有坂（1938）と森（1991）による研究があり、長崎にいる唐通事日本語の音節を中国語の「杭音」「漳音（実は南京官音）」「泉州音」「福音」で音写する資料である。呉方言にあたる「杭音」では、ハ・ヘに「花」「靴」といった HU 型字があてられているが、それ以外は F 型字で写されている。一方、「南京官音」ではすべてのハ行音に F 型字があてられている。仮に編纂に携わった唐通事らが本当に長崎方言を対象に漢字をあてたとすれば、「南京官音」が示したとおり、すべてのハ行子音はフと同じである、という当時の認識がわかる。しかし、「杭音」でも示したとおり、ハの場合、やはりフのような音とやや異なった音声で実現されており、話者がその相違を認めた。おそらくぞんざいな発音であろう。これは『吾妻鏡補』におけるハ・ホがさきに移行したという結論と一致している。ヘにあたる「靴」は「杭音」側の制限によるやむをえない選択である。

そうすると、18 世紀初期の長崎あたりの方言にとって、ハ行子音とフの子音は一般的に同一視できるが、ハに関して違いが認められる場合もある、ということがわかる。『吾妻鏡補』がもし 18 世紀初期の成立とすると、HU 型字は音韻上まだ「脱唇音化」の反映とは認められないが、18 世紀後半の成立とすると、「脱唇音化」の反映となるのであろう。成立年次についてはさらに考証する必要があるが、ハ・ヒ・ヘの音写に H 型字も用いられていることから、おそらく『東音譜』よりも後、18 世紀後半の成立であろう。

5. おわりに

本稿は『吾妻鏡補』にみるハ行子音について考察した。結論として、『吾妻鏡補』は 18 世紀の長崎あたりの方言における、ハ行子音の声門摩擦音（硬口蓋摩擦音）への移行を反映している。同資料に用いられた曉母合口字（HU 型字）は $\phi > h$ という変化の中間段階の音価を表している。それを「脱唇音化」の反映と認められるかどうかは同資料の成立年次に関わり、見通しとして同資料は 18 世紀後半の成立で「脱唇音化」を反映していると考えられる。

HU 型字が示した音価、「脱唇音化」が発生する原因などは未解決のままである。また、本稿が提示した各型字とハ行子音との対応関係は 16 世紀のハ行子音の検討にも通用できるようであるが、さらなる考証が必要であろう。それらは今後の課題とする。

【参考文献】

- 有坂秀世（1938）「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」『国語と国文学』15(10)
大友信一（1963）『室町時代の国語音声の研究』至文堂
カールグレン、ベルンハルト著、趙元任・羅常培・李方桂訳（1940）『中国音韻学研究』商務印書館
高山知明（2016）「ハ行子音の脱唇音化-個別言語の特色と音韻史-」『日本語史叙述の方法』ひつじ書房
高山倫明（1989）「吾妻鏡補の「国語解」の音注について」『国語学論叢：奥村三雄教授退官記念』桜楓社
趙元任（1928）『現代呉語の研究』清華学校研究院（商務印書館 2017 版を利用）
濱田敦（1952）「弘治五年朝鮮板『伊呂波』諺文対音放-国語史の立場から-」『国語国文』21(10)
馬之濤（2014）「中国資料に見える室町時代のハ行子音音価の再検討-『日本国考略』を中心に-」『国語国文』83（4）
森博達（1991）「近世唐音と『唐音譜』」『国語学』166
渡辺三男（1963）「吾妻鏡補の日本語資料」『典籍論集：岩井博士古稀記念』岩井博士古希記念事業会

【資料文献】

- 大友信一・木村晟（1972）『吾妻鏡補所載海外奇談国語解 本文と索引』小林印刷株式会社出版部
京都大学文学部国語学国文学研究室編（1961）『全浙兵制考 日本風土記』京都大学国文学会
京都大学文学部国語学国文学研究室編（1965）『日本寄語の研究』京都大学国文学会
京都大学文学部国語学国文学研究室編（1968）『纂輯 日本訳語』京都大学国文学会
高山倫明（1998）「翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解（一）」『文献探究』95
高山倫明（1999）「翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解（二）」『文献探究』96
高山倫明（2000）「翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解（三）」『文献探究』97
高山倫明（2001）「翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解（四）」『文献探究』98
渡辺三男（1962）「吾妻鏡補所引の日本語彙一校本「海外奇談国語解」」『駒沢大学文学部研究紀要』20